

現代社会と大学



巻頭言

山中 千代衛*



「大学は文化の根元であり、大学がいかに機能しているかが社会の将来をきめる」と言われています。ヨーロッパの大学はアテネ、ローマを源流として文化、哲学、科学の中心という形で発展してきました。アメリカの大学はどちらかというと若者に職業訓練を施す場という色彩が強い。日本の大学は明治この方欧米に追い付け追い越せという国是の下、国に奉仕する人材を養成する目的で発足しています。したがって工学、医学、農学、商学、法学などを扱う大学校が初めに建設され、文学や理学はあとから手当されました。この流れは自然の哲理や文化・芸術の発展を大切にするよりは、実学の消化・吸収に力を致す考えに貫かれています。

今や世界のGNPの40%をアメリカと共有するという経済大国に成長し、まさに明治以来の国の悲願は見事に達成されたのです。見方によればわが国の文教政策の勝利でありましょう。しかるに21世紀を目前にして先進諸国のトップグループに位置しながら、一向に国際的に尊敬に値する取扱を享受出来ないという。何が問題でありましょうか。

今こそ大学のあり方を原点に戻って問いなおす必要があります。大学の質的大転換をはかることが大学人に課せられた使命と言わねばなりません。現在わが国の18才人口は205万人、そのうち半数の人が大学進学を希望し、70万人が入学、40万人が入学出来ない状態です。一方大学院の学生は8万人で、戦前の大学生総数8万人に対応しています。また今日高等教育を受けている人数は250万人、これはやはり戦前の中等教育を受けた人数に相当するのです。わが国の大学は過去40年のうちに大衆化を大いに推進したがその内容はかならずしも満足すべきものではありません。大学を論じる時、世界で有数の大学をイメージするのか、日本の大学の現状をイメージするのかでその視点は大いに異なります。昨今わが国での大学の選択はコミュニティー大学か大学院大学かの2つに大別されるようです。そのなかで大学をいかに時代のニーズに適応させ、個性化をはかるか、国際的に開かれ世界に通用する組織にするか、自己評価をばねにして運営の近代化をすすめるか、大学の活力を疎外しつつある入学選抜方法をどのように改良するか、大学人の懸命の努力が求められています。ガルブレイスは「社会の進展はいい教育と公正な行政にかかっている。産業の発展はそれらについてくる」と言っています。

*Chiyoe YAMANAKA

1923年12月14日生

昭和23年大阪大学工学部電気工学科卒業

現在、姫路工業大学学長・大阪大学名誉教授、

工博、レーザー工学、プラズマ物理学

TEL 0797-34-1481